# 巣鴨町を掘る

## ― 眠りから覚めた江戸時代 ―

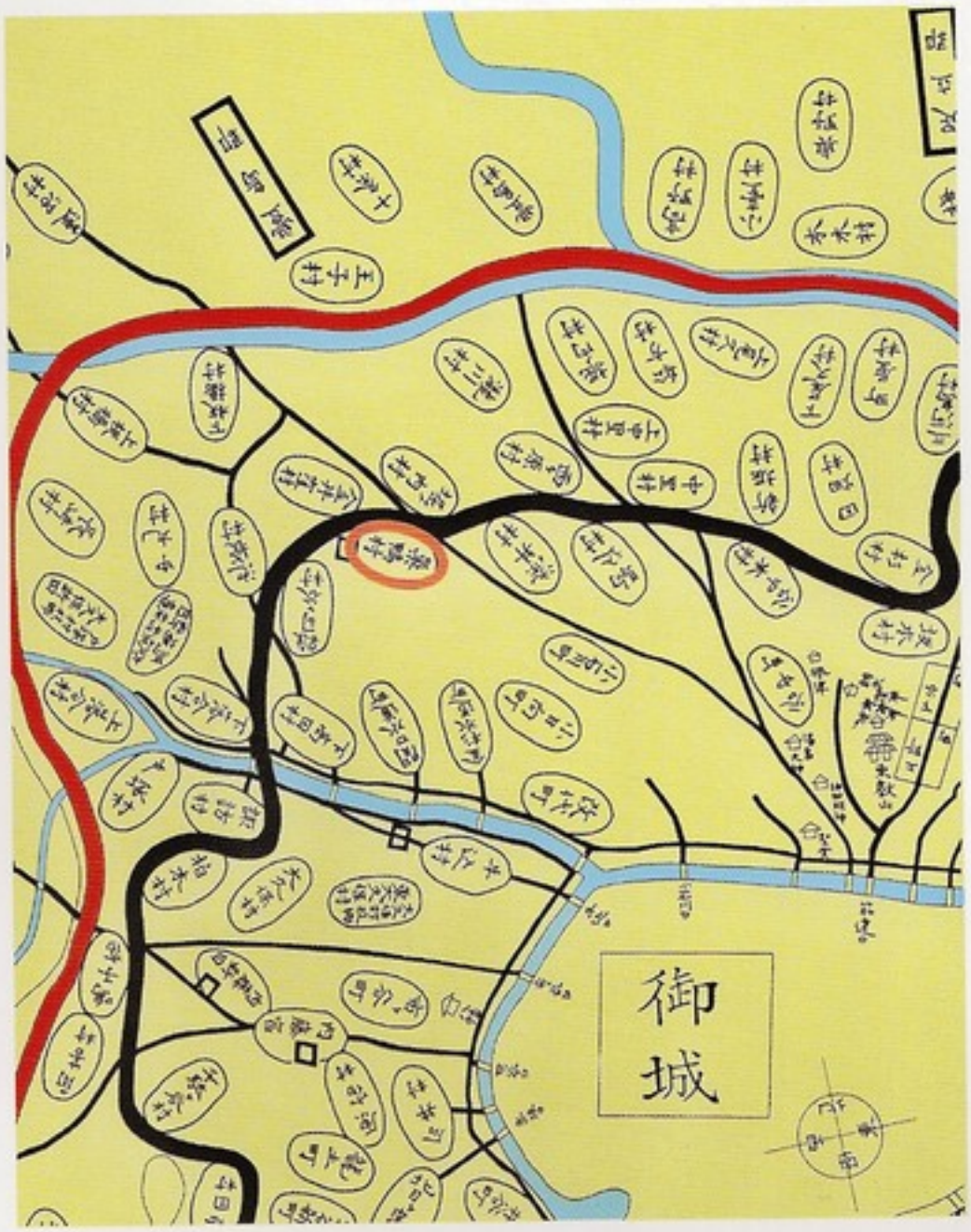
## 巣鴨町を掘る

「おばあちゃんの原宿」と呼ばれる巣鴨の地蔵通り。毎月４のつく日には大変な賑わいを見せることで有名ですが、この通りやお店の下に江戸時代の巣鴨町が眠っていることは案外知られていません。でも実は、10年以上前から江戸時代の遺跡を発掘しているのです。ちょっと思い出してみて下さい。時々、見たことはないでしょうか。商店を建替える前に泥だらけの人たちが地面に座り込んで鍛冶屋の炉跡を一生懸命に掘っていたり、あるいは深夜、国道17号線の下から現れた江戸時代の中山道を写真に撮っている姿を。

こうした巣鴨町の発掘調査は、1991年（平成３年）から本格的に始まり、今日まで84ヶ所の調査が行われています。ひとつひとつの調査は小さなものですが、これらの発掘調査によって見えてきた、江戸時代の巣鴨町に暮らした人々の生活をご紹介していきましょう。

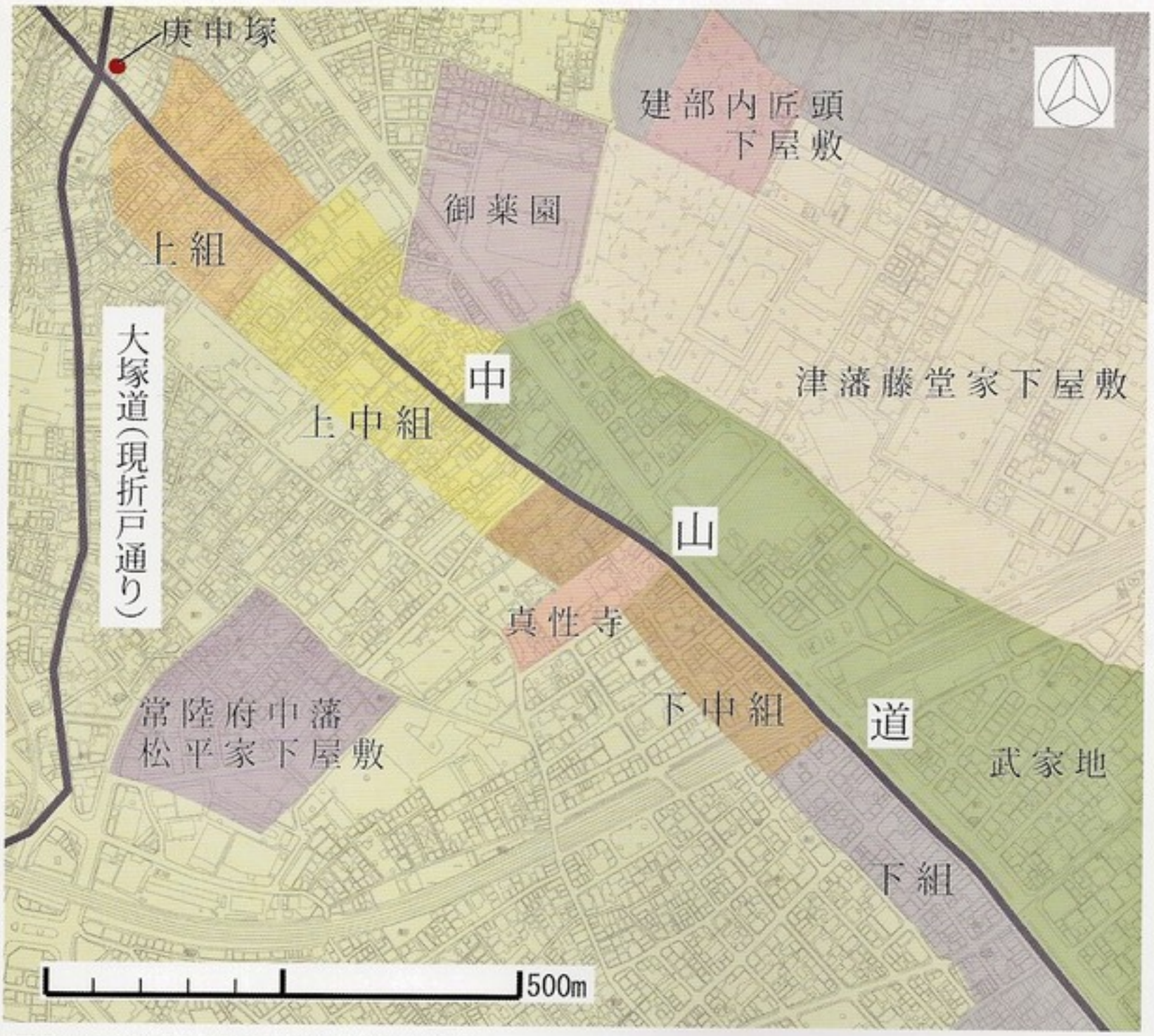
現在の地蔵通り

大坂屋ビル地区の発掘調査



真性寺の六地蔵

**旧江戸朱引内図**
文政元年（1818）に幕府が作成した江戸の内外を示す図。朱引線までを御府内（江戸の範囲）とし、墨引線が町奉行の支配する範囲。
赤い囲みが巣鴨村の位置。




**嘉永５年(1852)の巣鴨町周辺と現地比定図**
切絵図を基にしているため、巣鴨町四組(上組・上中組・下中組・下組)の範囲は実際とは異なる可能性があり、今後の発掘調査の成果と、近年発見された「巣鴨町軒別絵図」(6頁参照)を検討していく必要があります。

## 江戸時代の巣鴨町

巣鴨町は江戸時代に中山道(現地蔵通り～白山通り)に沿って細長く発達しましたが、もともとは江戸の北側に位置する農村のひとつでした。増上寺所蔵の史料によれば、慶長15年(1610)から巣鴨村は増上寺の寺領となっており、江戸時代を通して続きます。

巣鴨の町を見てみると、板橋方面から上組・上中組・下中組・下組の大きく４つに分かれ、これらの中央付近には江戸六地蔵のひとつである真性寺があります。特徴的なのは、江戸の町の多くが道の両側に軒を連ねるのに対して、巣鴨町では下中組・下組の向かいに大名や旗本といった武家の屋敷が並ぶ、いわゆる片側町となっていることです。

この中山道に沿って次第に町が作られるようになっていくのは、江戸時代の前半頃まで遡ります。そして延享２年(1745)には幕府から町として公認され、町奉行の支配地、つまり大都市江戸の一部にとなりました。この後、巣鴨町は江戸時代の後半、文化年間(1804～1817)に大流行した菊作りと、その見物客によって賑わいをみせることとなります。

## 巣鴨の“鍛冶屋さん”

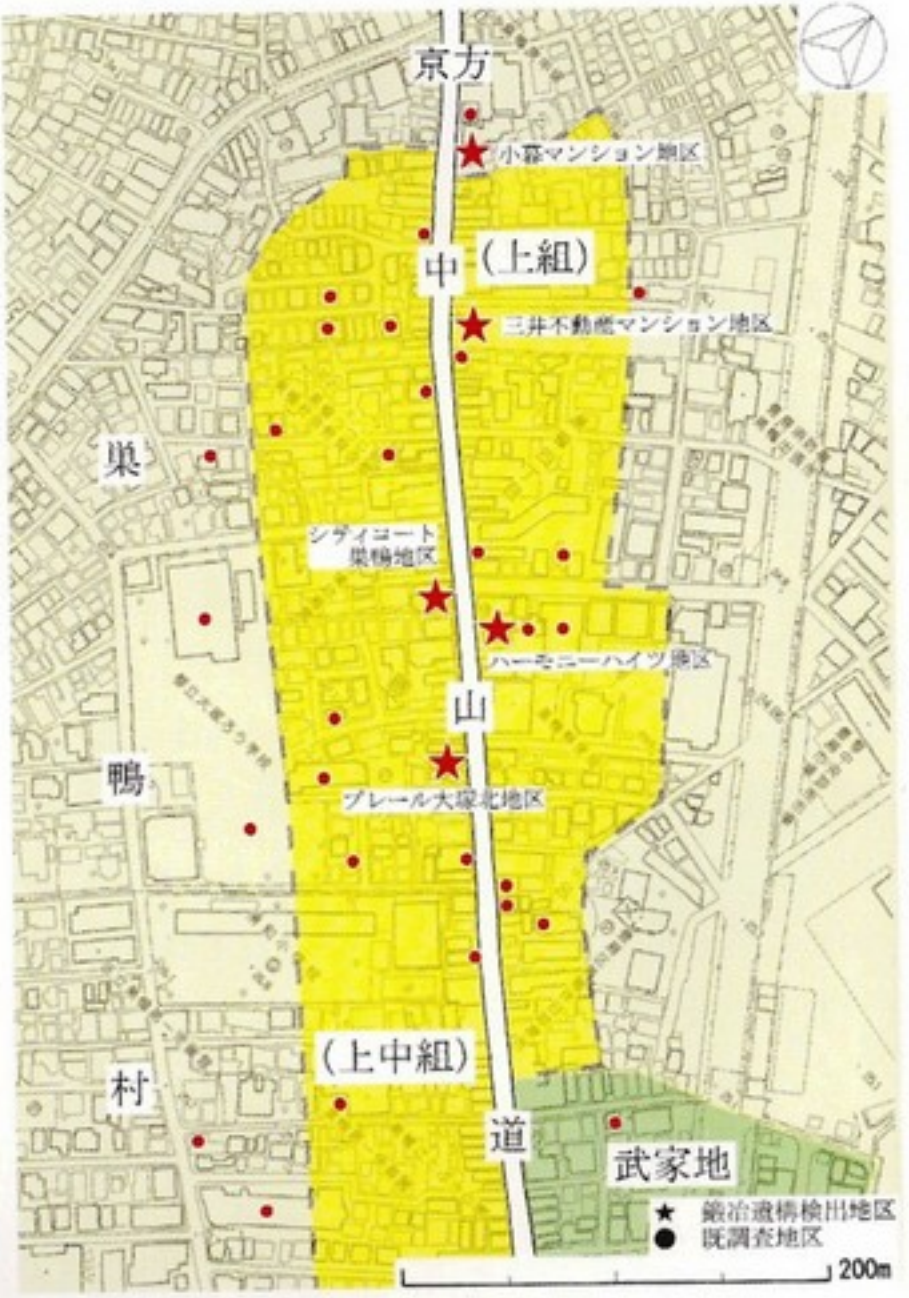
みなさんは「暫時(しばし)もやまずに槌うつ響(ひびき)。飛び散る火の花、はしる湯玉。‥」で始まる「村の鍛冶屋」という唱歌をご存知でしょうか？　また、ご年配の方々は、近所の鍛冶屋さんがトンテンカンと鉄を打っていた光景をご覧になったことがあると思います。かつて、鍛冶屋さんは極めて身近な存在であったといえます。

巣鴨遺跡を発掘調査しますと、鉄滓(「てつさい」あるいは「てつし」:鉄や鉄製品を作る際に生じる「かす」)や羽口(「はぐち」:フイゴの先につける土製の送風管)の破片が多く出土します。これは近くに鍛冶屋があったことを意味しています。そして、これまでの発掘調査で、いくつかの地点で鍛冶炉が見つかっています。

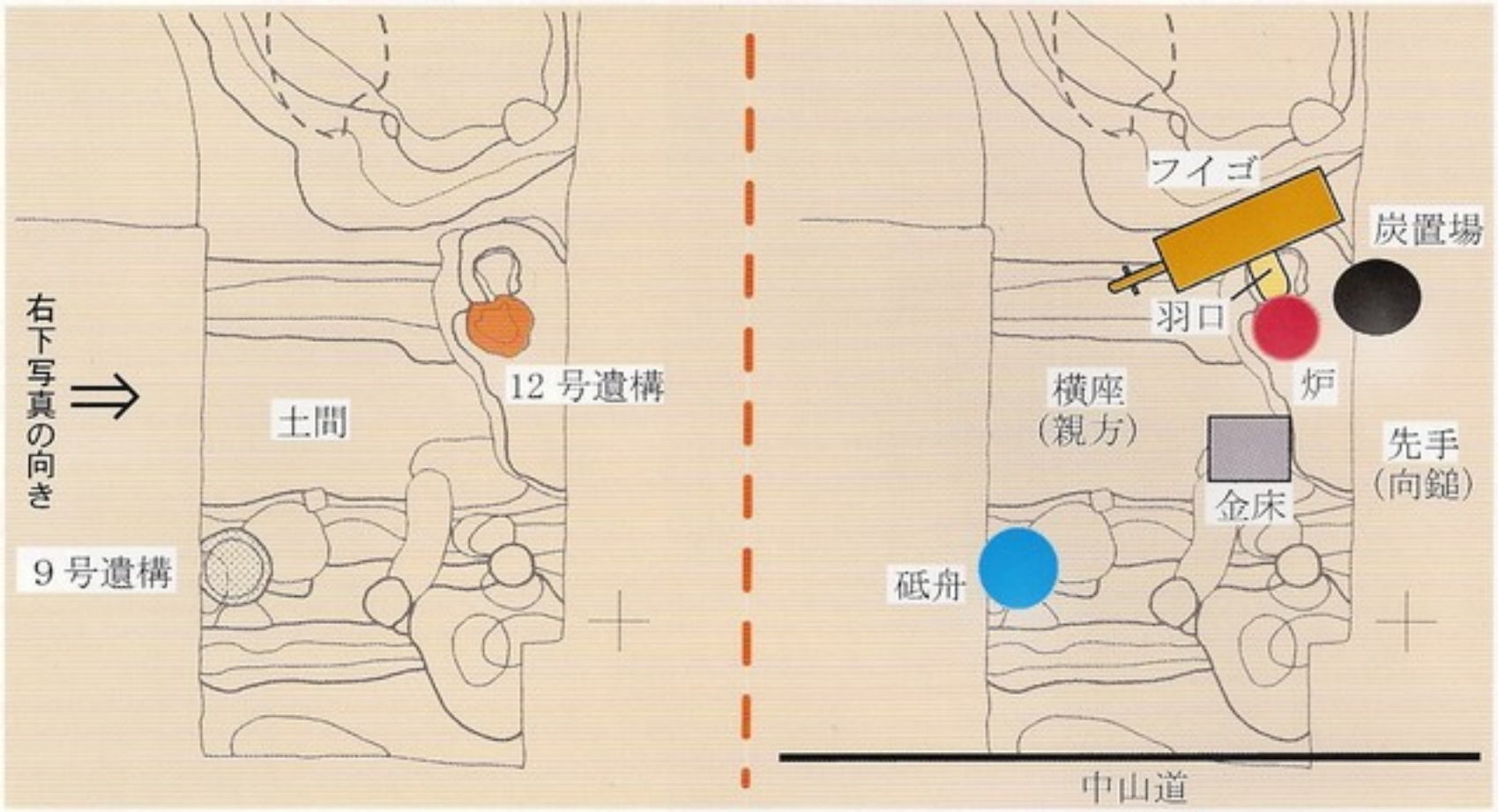
「軒別絵図」(6頁参照)を見てみますと、幕末頃の巣鴨町には７軒の鍛冶屋さんがいたことが書かれています。その内訳は、上組に３軒、上中組に２軒、下中組に２軒です。この絵図と鍛冶炉が見つかった地点を重ねてみますと、上組の３軒の鍛冶屋を当てはめることができます。三井不動産マンション地区は「鍛冶屋／五人組持店／忠八」に、ハーモニーハイツ地区は「鍛冶屋／家主／平左衛門」に、プレール大塚北地区は「鍛冶屋／家主／藤三郎」であったと考えられます。

シティコート巣鴨地区出土鉄滓

プレール大塚北地区出土羽口




巣鴨遺跡内で鍛冶炉が見つかった地点




**ハーモニーハイツ地区の鍛冶空間の復元**　(左:遺構配置図、右:復元図)

鍛冶を行う作業場は、多くの場合、中山道に面した土間(三和土)に構築されています。

ハーモニーハイツ地区では、鍛冶炉である12号遺構を中心として、いくつかの関連する遺構が確認されました。火床(ほど)と呼ばれる鍛冶炉、送風装置であるフイゴ(鞴・吹子)、成形を行う金床(かなとこ)、水打ちや焼入れを行うための砥舟(とぶね)、炭置場などの痕跡が確認されています。

鍛冶空間を復元してみますと、中山道を行き交う人々に見えるようなディスプレイで、鍛冶活動を行っていたことが窺われます。同様の状況がプレール大塚北地区でも確認されています。

これは、江戸時代の初期に狩野吉信によって描かれた『職人盡図』の「鍛冶師」の様子に良く似ています(次ページ参照)。

**ハーモニハイツ地区12号遺構**

**プレール大塚北地区の作業場**
中山道側から撮影。土間の中に鍛冶炉(向かって左側)が構築されています。

シティコート巣鴨地区20号遺構（鍛冶炉）
焼土と灰が何枚も厚く堆積しています。

シティコート巣鴨地区20号遺構出土釘
小型の釘が200点近く出土しています。

鉄滓に溶着した釘
炉内に落ちた釘（○印）が鉄滓と溶着したもの。シティコート巣鴨地区出土。

参考「鍛冶師」（部分）（『職人盡図』埼玉新聞発行）

鍛冶屋と一口に言っても、「農鍛冶・刀鍛冶・包丁鍛冶・鉄砲鍛冶・鎌鍛冶・鍬鍛冶・鋏鍛冶・鋸鍛冶・剃鍛冶・錘鍛冶・錨鍛冶・鑢鍛冶」など、江戸時代にはさまざまな鍛冶屋がいました。

巣鴨遺跡では鍛冶屋がいくつか発掘されていますが、実際にどのような物を製作していたかは、殆んど分かっていません。しかしながら、発見された遺構、鉄滓や羽口の特徴は地点ごとに異なっており、異なる作業を行っていたことが想定できます。

シティコート巣鴨地区の20号遺構では、ほぼ同じサイズの釘が大量に出土したことから、釘のリサイクルを行っていた炉であると推測しています。出土した鉄滓の科学的な分析成果からも、鍋や釘などの古鉄のリサイクルの存在が指摘されています。様々なニーズに応えて、様々なものが作られ、あるいは補修されたことが窺えます。

巣鴨村では鍛冶の痕跡が殆んど見つかっていません。おそらく、巣鴨町の“鍛冶屋さん”は、すぐ裏に広がる巣鴨村の“鍛冶屋さん”でもあり、中山道を往来する人々のための“鍛冶屋さん”でもあったといえます。

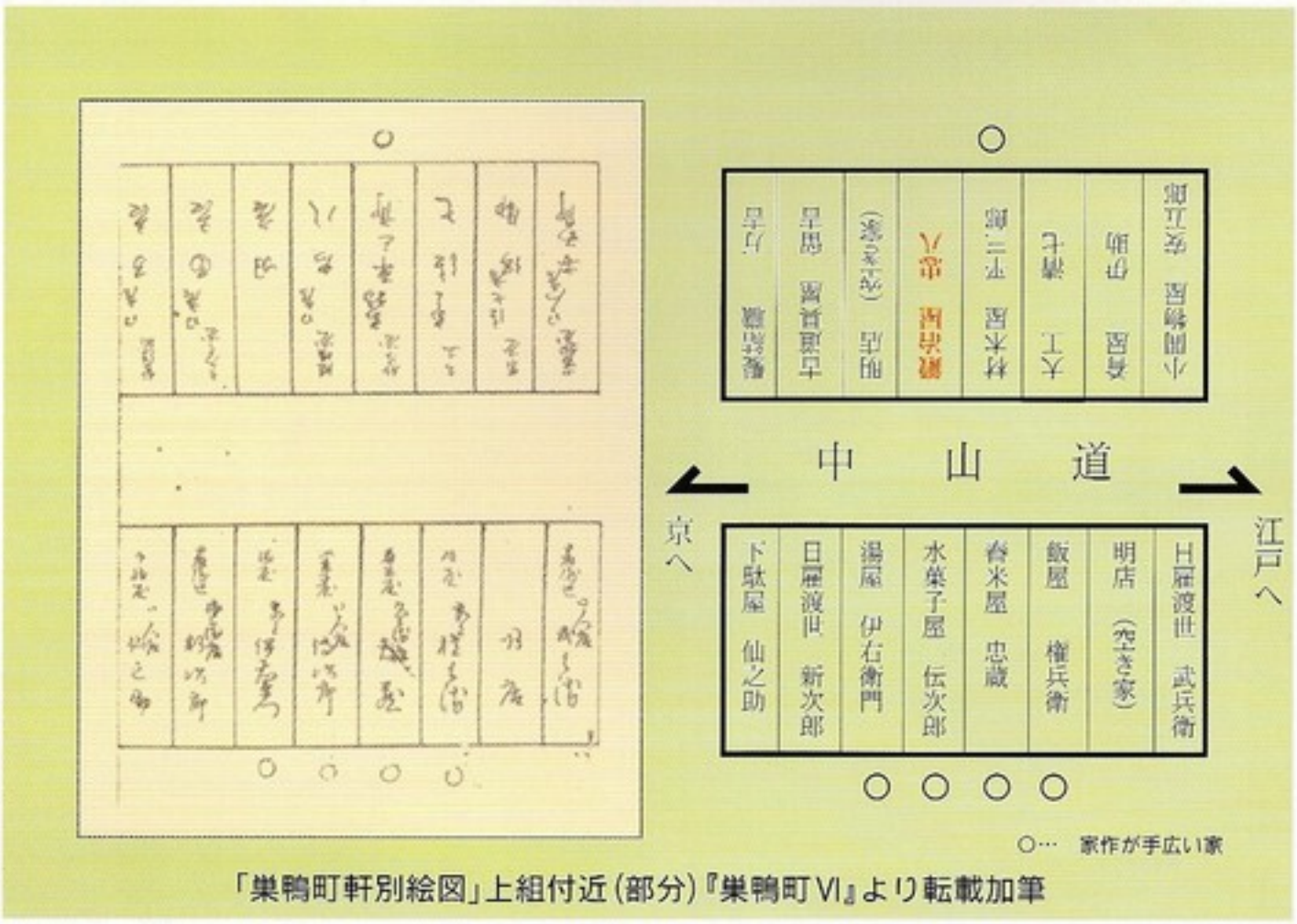
## 「巣鴨町軒別絵図」とは？

近年、新たに発見された史料に「巣鴨町軒別絵図」（以下「軒別絵図」）があります。国立国会図書館の旧幕引継書「和宮御下向」の中にある町方絵図で、幕末の1861年（文久元年）11月の皇女和宮が降嫁する際に作られたものです。このときの行列人員が多数であったため、本来は宿泊する町ではない巣鴨町にも急遽宿泊することとなりました。このため絵図は巣鴨町名主政右衛門が急いで作成し、板橋宿にいる代官に提出されるまでわずか３日であったといいます。幕末の巣鴨町に住んだ人々がわかる貴重な史料と言えるでしょう。

「軒別絵図」には合計238軒の居住者と家の所持（持家か借家か）が書かれており、家が広いものには丸印がついています。蕎麦屋、青物屋、馬具屋、植木屋、大工、髪結いなど数多くの職業が見られます。なかには「菓子屋　弥三郎」などと、現在もある和菓子店「福島屋」の祖先の名も見えます（場所は当時から移転しています）。

この「軒別絵図」の発見で、これまで発掘調査を行ってきた場所をある程度は特定ができるようになりました。ただし、絵図には各家の正確な大きさを書いていないため、現在のどこに該当するかがはっきりとしないのです。また絵図に書かれた職業とは違うものが出土することもあります。まだまだ検討すべき課題は多いのですが、現在、三井不動産マンション地区の発掘調査で見つかった鍛冶屋を「鍛冶屋　忠八」であろうと推定しており、これを定点として町全体を復原していく試みを続けています。

参考文献：高尾善希「近世巣鴨町の機能と景観－「巣鴨町軒別絵図」の分析を中心に－」
『交通史研究』第61号、豊島区遺跡調査会発行『巣鴨町Ⅵ』




「巣鴨町軒別絵図」上組付近（部分）『巣鴨町Ⅵ』より転載加筆

藤和シティホームズ巣鴨地区（中山道から撮影）

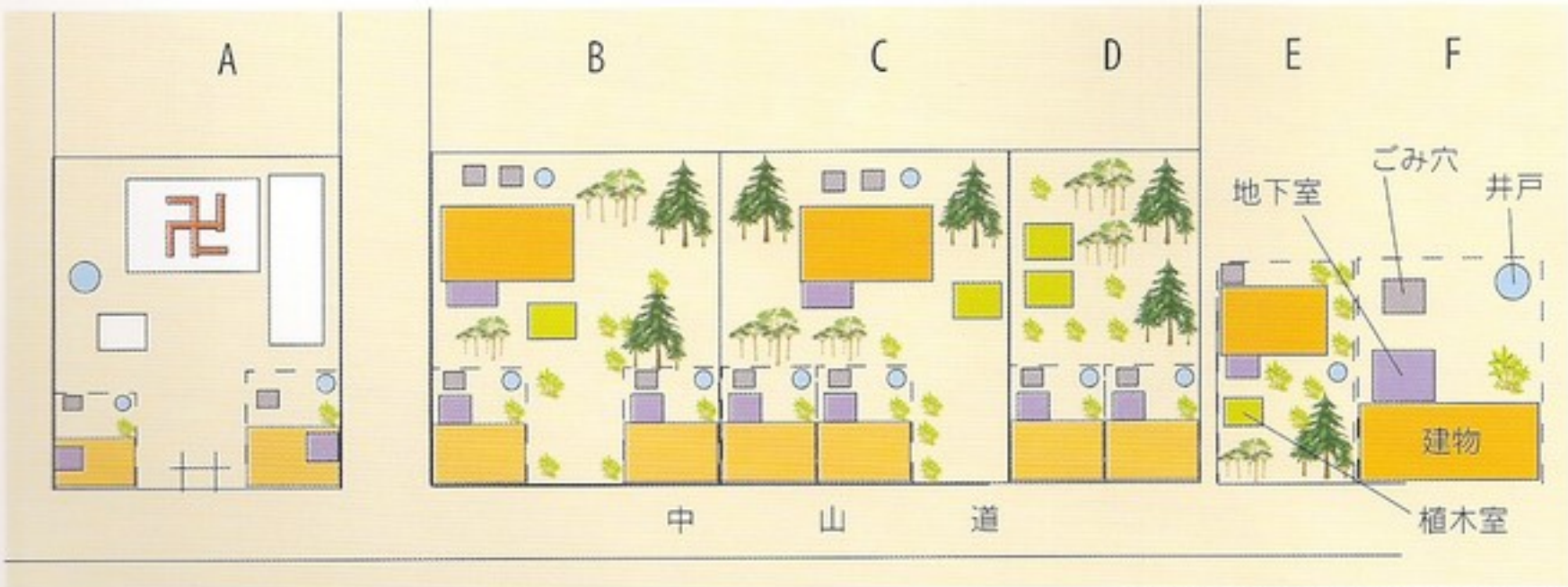
底に穴を開けて植木鉢として利用した半胴甕

## 植木屋

「日本の首都、江戸の郊外には、商売用の植物を栽培している大きな苗木園が幾つもある。江戸の身分のある人びとは、すべて高度の文明人のように花を愛好するので、花の需要は極めて大きい。江戸の東北の郊外にある団子坂、王子、染井の各所には、広大な植木屋がある。」（ロバート・フォーチュン『江戸と北京』）

日本に訪れた外国人が見たように、染井と同じく巣鴨にも多くの植木屋がいました。文久元年（1861）の「巣鴨町軒別絵図」には、238軒中20軒が植木屋と記されています。この頃は菊見が大流行していたこともあり、菊栽培が盛んでした。

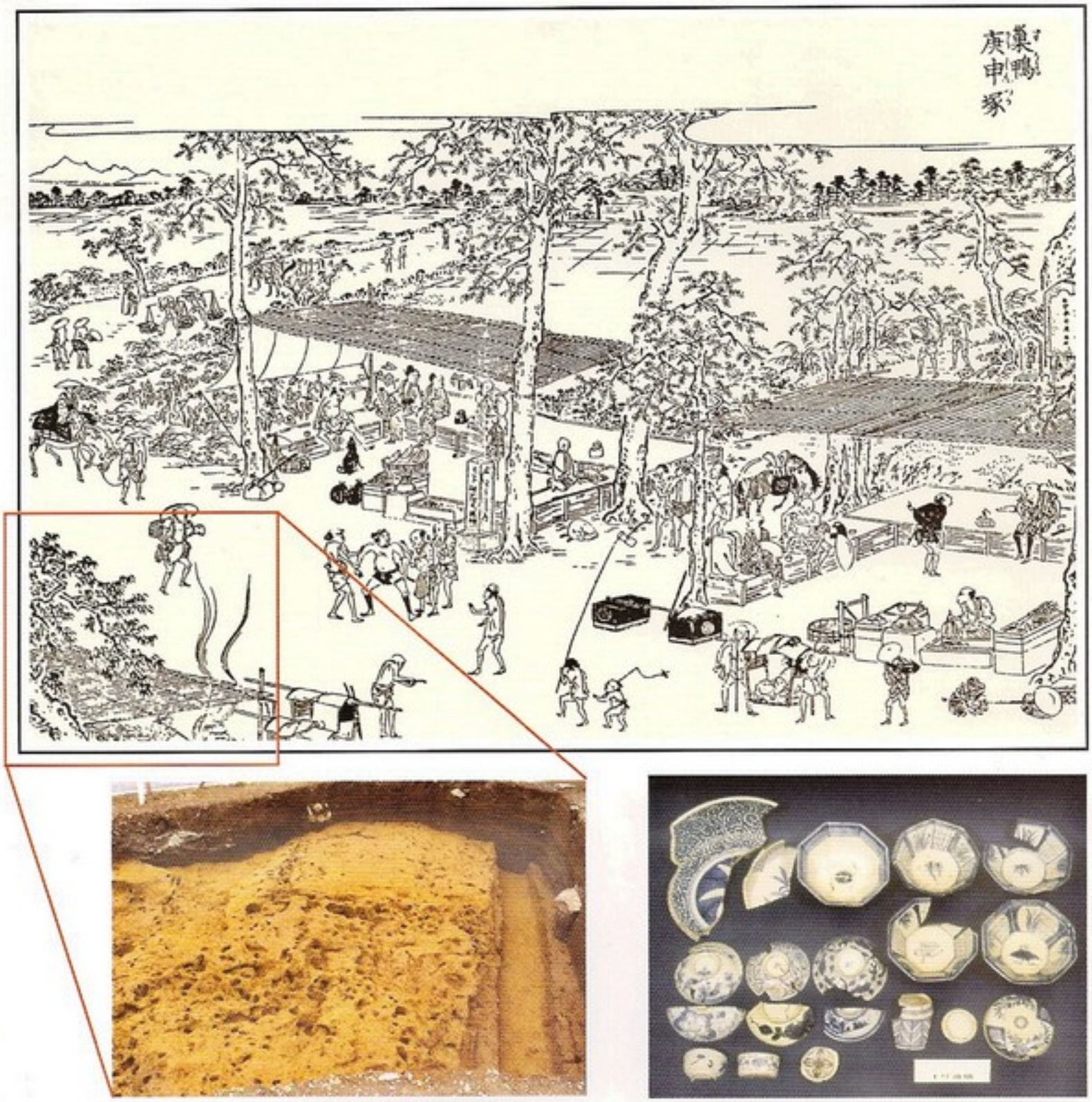
なかでも、斎田弥三郎は富士山を題材に菊細工をすることで有名な植木屋で、浮世絵などにも描かれています。藤和シティホームズ巣鴨地区は、この植木屋の斎田弥三郎宅跡と推定される場所で、中山道（現在は白山通り）沿いの下中組にあたります。発掘調査では、植木屋らしく植栽痕（植物を植えた跡）が数多く見られます。また出土した遺物は、やはり植木鉢が目立ちます。土製のものが大半ですが、なかには磁製や陶製のものも見られます。半胴甕と呼ばれる甕は桜草に適していると言われ、底にわざわざ穴を開けて植木鉢にして使っています。




巣鴨町の植木屋と地借のモデル図

A・B・Cは手前の土地を小割にして貸し、奥が自分の持ち家。Cは裏手が地主の植木溜め。D・Eは持ち家の植木屋。

『江戸名所図絵』長谷川雪旦画
天保七年（一八三七）刊行






セザール巣鴨地区の葭簀囲と側溝



桃花源ビル・友泉巣鴨ビル地区
出土の飲食器

## 料理屋と茶屋

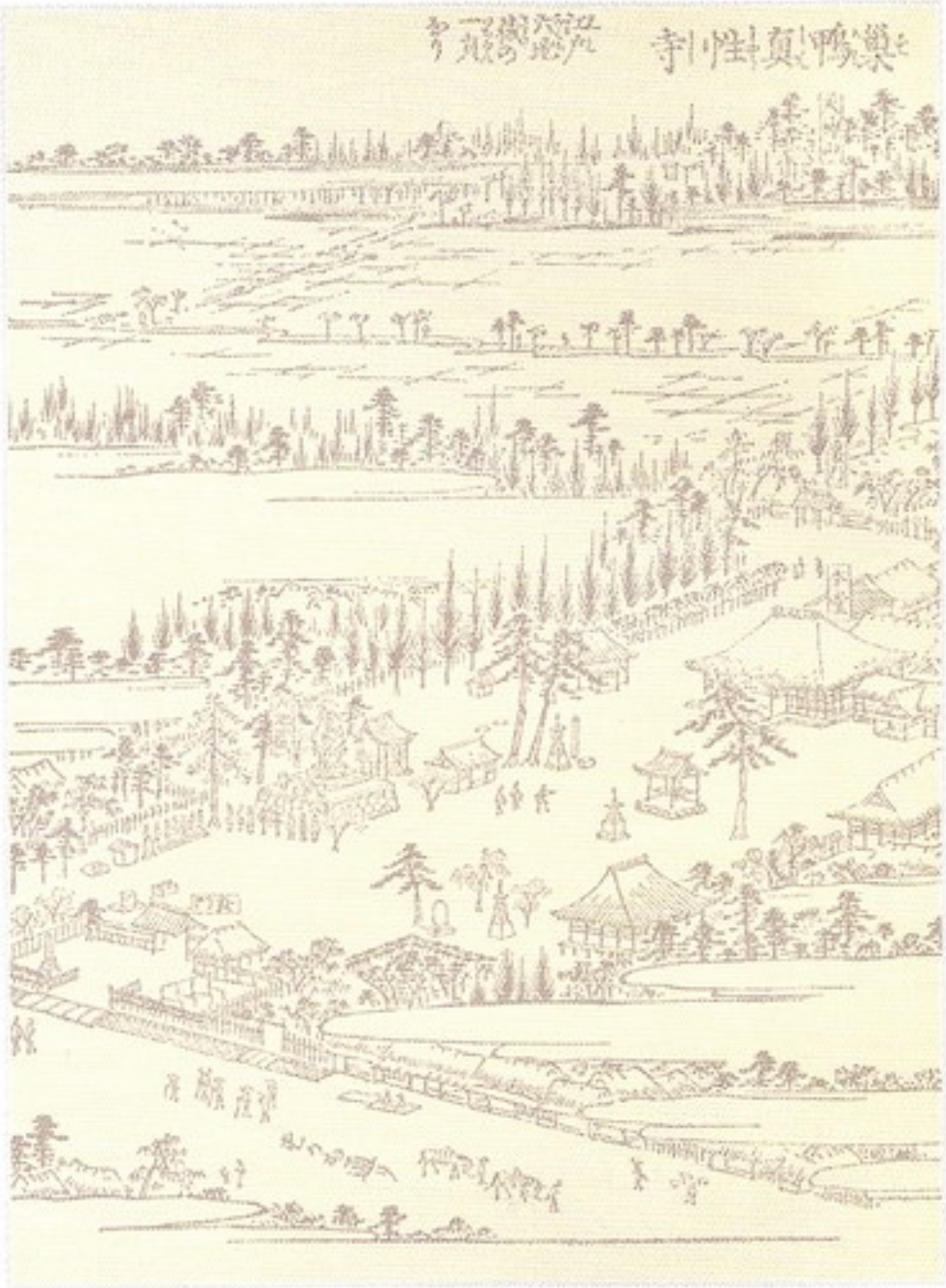
桃花源ビル・友泉巣鴨ビル地区は中山道沿いの下中組にあたり、地元の伝承では植木屋の保坂四郎左衛門の敷地とされていました。保坂家は代々四郎左衛門を名乗り、寛政７年(1795)には将軍家の菊御用を勤めています。しかし、敷地の中に大きく掘られたごみ穴から大量に出土したものは、植木鉢ではなく、陶磁器の碗や皿、徳利や土瓶といった飲食器でした。これらを植木屋が捨てたとは考え難いことから、居住者の再検討が行われました。発掘された資料と、「巣鴨町軒別絵図」などの文献史料を比較した結果、飯屋の平右衛門が植木屋四郎左衛門の土地を借りて営業していたことがわかりました。このように土地の前庭部分を借りて飲食店を営むのは、おそらく菊見で訪れる見物客目当てだったのでしょう。

一方、巣鴨町から外れた庚申塚の向かい、中山道と大塚道(現折戸通り)との角にあるセザール巣鴨地区の発掘調査では、『江戸名所図会』に見られる葭簀(よしず)囲いの茶屋と考えられる跡が発見されています。直径３～７cm程度のごく小さな穴が数多く穿たれており、四角く囲われた部分に葭簀が張られていたのがわかります。中山道の側溝の脇に建てられた小さな茶屋が、道を往来する人々の喉を潤したことでしょう。

## 真性寺の発掘調査

地蔵通り商店街の入口に位置する醫王山真性寺（新義真言宗豊山派）は、江戸時代の巣鴨町で唯一の寺院です。創立年代は不詳ですが、1615（元和元）年に六世祐遍が中興開山したとされ、由緒の古いお寺です。また江戸府内の境界施設として認識される江戸六地蔵尊のひとつがあることは特筆すべき点です。

発見された遺構には、建物跡、墓坑群、植栽痕、ゴミ穴などがあります。建物跡は、その一部を見つけたのみで全容はわかりませんでしたが、『江戸名所図会』などに描かれている建物から想定すると、場所としては本堂に付属する何らかの施設であったと考えられます。寺域の一画には墓地があり、その墓坑群からは、六道銭や泥塔を伴った計10体



『江戸名所図会』巻4「巣鴨真性寺」
主要伽藍や六地蔵尊、門前が描かれています。

大きなゴミ穴　人と比べるとその大きさがわかります。

土抗墓群　丸い形に掘られており、釘が出土したことから、早桶に入れて埋葬していたと推測されます。

ゴミ穴から出土した遺物
彩色のある肥前産の磁器碗（左）、輪宝文瓦（右）

の人骨が出土し、うち2体が幼児でした。

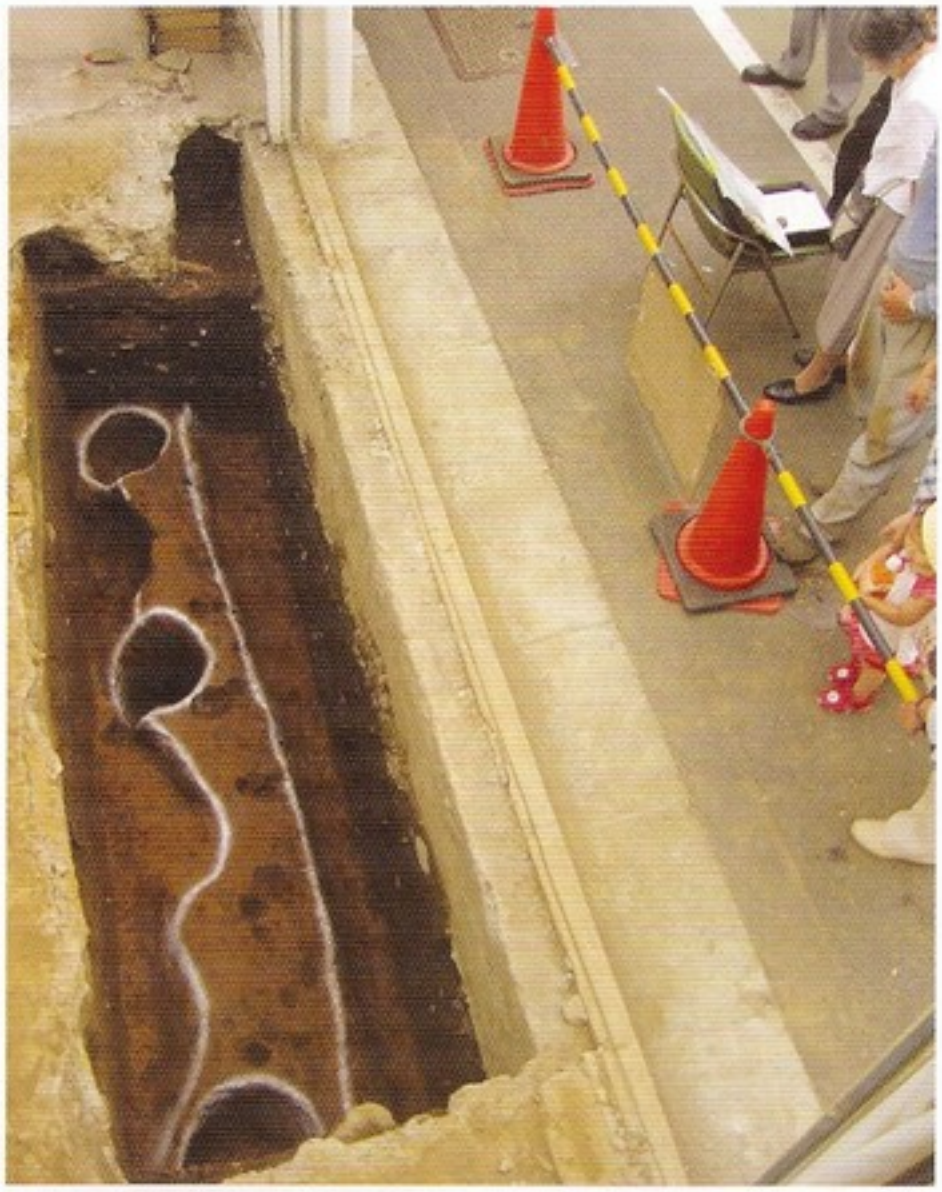
現在の本堂から離れた北西側では、ゴミ穴が発見され、香炉や線香立てなどお寺に関連する遺物や屋根瓦が大量に出土しました。中には、豊島区内の遺跡でも珍しい彩色のある肥前産の碗や唐津焼の甕が混じっていました。

出土した屋根瓦をみると檜扇(ひおうぎ)文(裏表紙参照)や輪宝(りんぽう)文といった珍しい文様を施しているものがあります。これは、真性寺と密接な関係を持つ文様であり、現在の真性寺の屋根瓦にも、同じ文様の瓦が葺かれています。

発見された溝からは当初の真性寺の寺域を知ることができます。江戸時代初期の段階には寺域が中山道にまで及んでいたことがわかり、現在よりも広かったと想定されます。17世紀後半頃に中山道側の寺域の一部を借地し、建物が建って門前町ができて寺域は縮小していきます。

その他にも、墓標を大量に廃棄したゴミ穴もあれば、一方で墓標を礎石に転用した建物跡もあり、庭園の鑑賞施設である水琴窟(すいきんくつ)などといったユニークな遺構も発見されています。水琴窟とは、地中に伏せた甕を埋めて空洞を作り、そこに滴り落ちる水が反響して、琴のような音色に聞こえるようにしたものです。

このように町人地や武家地にはあまり見られない遺構・遺物が多く、信仰の場としての真性寺の姿を如実に反映しています。そして、信仰の中、巣鴨町の歴史を考える上で欠くことができない課題であるといえます。



**中山道沿いの溝**　中山道の側溝であり、寺域の範囲でもあります。

**真性寺庫裏地区の礎石建物址**
礎石の一部に墓標がみえます。

木樋　敷地境に設置されます。

門前町で使用された皿

## 門前町家の暮らし

前項でも触れましたが、中山道に面した真性寺寺域の一部が借地され、真性寺門前町（以下門前町）が建ち始めます。門前町は、出土遺物などから巣鴨町の他の町家よりも早く、17世紀後半頃には出現することがわかっています。

門前町の特に中山道に面したオモテの部分からは、江戸時代から現代にいたるまで異なる時代の土間が幾重にも重なって貼られていて、その断面はまるでミルフィーユのようでした。オモテの空間には床下収納を思わせる貯蔵用の地下室や煮炊き用の竈（かまど）といった生活の痕跡がよく残っていました。

寺域では、色絵碗の他に絵付けや作りが丁寧な陶磁器、宗教色の強い遺物が中心であるにの対し、門前町からは庶民の生活の場らしい碗や皿、調理器具などの生活雑器の出土がほとんどでした。

敷地の奥側である「ウラ」では、ゴミ穴や植栽痕などが発見されており、庭のような空間であったと想定されます。このウラの空間には、羽釜（はがま）埋納遺構や巣鴨遺跡では珍しい木樋（もくひ）も見つかっています。

巣鴨町の町家の範囲は奥にとても長いのですが、門前町家の奥には真性寺が位置しているので、奥行が９～10間（約16～18m）と範囲は自ずと決まっており、他の町家に比べ、とてもコンパクトな敷地構成であったと考えられます。

青銅製聖観音像　高さ3.8㎝、重さ10ｇ

## 信仰と祭祀

巣鴨では、モノを意図的に埋める行為（埋納）の痕跡がしばしば発見されます。ここでは、そのうちのいくつかを紹介します。

### プレール大塚北地区出土の聖観音像

鍛冶屋さんの仕事場の下から、地鎮の際に用いた青銅製の聖観音像が発見されました。地鎮とは、建物などを建てる際に土地を司る神が怒らないように鎮め、人が神仏から土地を譲り受けるための祭祀のことです。現在は神主が執り行う地鎮祭が多いですが、古代以来の地鎮は、神道の他に、密教・修験道・陰陽道などさまざまな宗教・思想が混在していました。

どんな職人にも言えることですが、作業を行う空間は特別神聖な場です。鍛冶の仕事場である土間を造る際に、聖観音像を埋納したと考えられます。聖観音は、全国各地で石仏などが造立されるなど、庶民に身近な存在として親しまれていました。

地鎮跡から出土した輪宝と橛

### 真性寺庫裏地区の地鎮遺構

ここで見つかった地鎮の跡は、現在の客殿庫裏を新築する以前に建てられていた建物を建てる際に使用したものです。地鎮遺構は旧建物の北東部において、密教法具で板状の銅製品である橛(けつ)を地面に突き刺し、その上端に輪宝(直径19㎝の銅製品)がのっていました。なお、この南側には、橛のみでしたが同じような遺構があり、同時期の地鎮遺構と考えられます。年代は近代と新しいものですが、古代から続く地鎮という慣習が江戸時代をへて、どのように行われ、受け継がれてきたのかを考える上で重要な資料です。

### 大坂屋ビル地区の羽釜埋納遺構

門前町のウラ(門前町と寺域の敷地境に近い場所)から土製の羽釜と2枚のお皿がほぼ無傷の状態で出土しました。一見すると、何かを調理した跡と思ってしまいます。しかし、正位で出土したことや羽釜と皿というセット、さらには敷地の南西部に位置することが重要になってきます。地鎮の一種である土公供(どこうぐ)跡と考えられ、その作法には五穀粥が供物として調理されます。五穀粥を羽釜で作り、皿に盛りつけ供物としたのでしょう。どちらも儀式的な一面をもつ用具として扱われています。そして陰陽道では、南西方向は裏鬼門にあたり、土地を邪気から守るためにこのような儀式を行ったと推測されます。

羽釜が埋納されている状況

胞衣埋納遺構（右側が中山道）
写真上 胞衣皿（合わせ口で出土しました）

## エクセルイン巣鴨地区の胞衣埋納遺構

胞衣（えな）とは、子供が生まれた際にその成長を願って胎盤を家の出入口や縁の下に埋納したもので、ここでは容器として土師器皿を合わせ口にして使用していました。

巣鴨町でみられる胞衣埋納遺構の大部分が中山道に面した表側（通り沿いの境界）で発見されます。一方で建物と裏口の境界や隣接地との境界にも埋納されているケースもあります。

通り沿いに列をなして重なるようにして埋められていますが、同じ場所に胞衣があると知っている人間（同じ家系の人）が意識して埋めたものと推測されます。巣鴨町のように町家の一区画が狭い地域では埋める場所が限定されていたようです。

日蓮像　高さ3.6㎝、幅2.8㎝、厚さ9㎜、重さ9.5ｇの小さな土製品です。

## マルジー号店ビル地区出土の日蓮像

中山道と敷地との境で、建物を建てる時に造成した盛土の基底部から埋納された状態で発見されました。この像の表面には袈裟をまとい、頭上には天蓋がのり、正面をむいて合掌する僧侶の姿がみられます。僧侶が座る台座には、「日蓮」と記され、日蓮の花押もあるので、この僧が日蓮であることは間違いありません。

都内の他の遺跡にもこれとまったく同じものが出土していますので、江戸時代に量産されたものであると窺われます。

日蓮信仰は祖師信仰とも言われ、「厄除祖師」として特に信仰されていて、招福除災を目的に埋納されたと考えられます。

このように、多様な信仰遺物が出土することで巣鴨に住む人々の精神文化を垣間見ることができるのです。

町人地と武家地の境界
松本藩水野家下屋敷の敷地境でもあります。

## 町の境堀

巣鴨遺跡では、大小種類のさまざまな溝や堀が数多く発見されています。

中山道の南側を並走する裏通りでは、道に沿って堀が発見されました。この堀は、疫病神などの侵入を防ぎ、町を守るために造られたもので、町を囲う境堀であったと想定されます。町を区画する目的だった境堀は、次第に性格を変え、比較的清浄な水が流れる用水や上水へと姿をかえていったと考えられます。

巣鴨町には、町人地だけではなく、大名屋敷などといった武家地もあり、中山道の北側は主に武家地で構成されています。当然町人地と武家地とを画さなければならないのですが、その境にあたる所からは、幅5.4m、深さ2.2mというとても大きな堀が見つかっています。その当時に町並みを眺めて中山道を歩いていて、突如こういった堀が現れるのは、とても異様な光景だったのではないでしょうか。

**発見された堀の位置** 緑は町の境堀、ピンクは武家地を囲む空堀、水色は排水路、を表します。

境堀ではありませんが、文献や絵図などから中山道を縦断する排水路があったことがわかっています。推定される排水路は現在道路になっており、明確な判断はできません。しかし、江戸時代にはこの道路の下に、現在ではみられない小さな谷が存在していました。この谷の窪みを利用して排水路を通していたと推測されます。

この谷及び排水路を境にして、武家地や町人地が隔てられていたので、一種の境界施設であるといえます。

**境堀** 全長は180m以上にもおよびます。

## 近代から現代へ

ここまで巣鴨町の地下に眠る江戸時代を発掘調査した成果を紹介してきました。しかし、発掘調査によってわかるのは何も江戸時代だけではありません。江戸時代より新しい明治、大正、昭和の時代についても発掘しなければわからなかったことが数多くあります。

たとえば、マイキャッスル巣鴨地区では太平洋戦争中の焼夷弾が建物の礎石のすぐ脇の地面に突き刺さった状態で出土しています。こうした歴史の発掘は決して華々しいものできありませんし、ロマンがあるものでもありません。しかし、忘れてはならないこの町の貴重な記憶です。このような近現代の歴史は地下に眠ってからまだ日は浅いのですが、江戸時代と今を生きる私たちとをつなぐ、地域にとって重要な歴史なのです。

**マイキャッスル巣鴨地区 近代礎石建物址**

**突き刺さった焼夷弾**

「中山道分間延絵図」部分

巣鴨村

特定非営利活動法人

としま遺跡調査会

2007年12月1日発行

この冊子は、財団法人 住宅総合研究財団の助成を得て作成しました。